

第三章 五十年記念図書館

一 創立五十年記念事業

慶應義塾は私立最初の大学部を創設したことは既述したが、それは法律に基くものではなかった。三十六年三月「専門学校令」が公布され、それに基づいて認められる大学となった。そこで施設の充実をはかることになる。その第一着手は煉瓦講堂の裏に木造校舎を造ることであった。そして図書館建築の必要も認められていた。「書籍館ハ今日ノ儘ニテ打棄置クヘキニ非ルカ故ニ現在ノ煉瓦造家屋内ノ事務室ヲ他ニ移シ、此建物ヲ修理シテ当分仮ノ書籍館及集会室トシ、他年經濟上余裕アル時ニ至リ立派ナル書籍館ヲ建築スルノ方針ヲ執ラン事ヲ勧告ス」(同年十二月評議員会)

独立の図書館の建設待望の声は益々高まり、三十八年図書館の監督に留学新婦朝の新鋭教授田中を当てたのも、この人に新しい建物を……の希望を当局は抱いていたからであろう。三十九年星文庫の委託によって煉瓦講堂が狭隘になったとき「明年は慶應義塾創立第五十年に相当するを機とし、広く記念寄附金を募集して拾余万円を要する一大記念図書館を建設せんとて目下その計画中なり」(学報三月)と報じた。田中も目前の図書館の整備・改善に力をそぐと共に、新図書館の構想にも夢をさせていた。三十九年三月行われた第一回全国図書館大会で田中は「図書館建築に

ついでに「注意」と題する講演をした。その要旨は図書館建築で最も留意すべきことは、防火・経済・将来への拡張計画の三つで、米国のシカゴ図書館長W・F・プール氏の説を基本とし、三十九年落成した帝国図書館や、東大・大橋図書館並びに着工中の日比谷図書館等を参照、批評しつつ、最後に「図書館其者は古本を埋葬する死せる墳墓にあらずして人を教育する所の生ける一大機関なれば、其設計の如きも普通の技師に一任することなく、大に此道に精しき諸学者の説に重きを置かざるべからず」で結んでいる。これは帝国図書館が分室法コンパートメントを採用して、防火に万全を期せうとしたにも拘らず、技師の設計によって「純粹ノ火災保険構造ト為ス能ハサリシ」を遺憾とし、使用者と技師との緊密な協力の必要をよびかけたものである。

かくて同年九月廿七日芝公園三縁亭で評議員の相談会が持たれ、朝吹英二、門野幾之進、福沢桃介、鈴木梅四郎、池田成彬の五名が図書館建設準備委員に選ばれ、十月十六日評議員会で可決された。そして発起人として百三十名の連名の建設趣意書が十二月五日発表された。その文章は義塾の発祥から五十年にわたる光輝ある歴史を述べたあと、「目下最も必要を感じるものは図書館の設備是なり。図書館は大学教育上に欠く可からざる設備にして、欧米諸国の大学を見るに何れも宏大なる図書館の設あらざるなし。蓋し大学専門の教育に教場の講義と共に図書館の研究に重きを置くは欧米一般の趨勢にして、其国々の大学が図書館を以て設備の一大要件と為す所似なれども、我国の如き公私図書館の数少なくして一般閲覧者の希望を充す能はざる国に於ては、大学の図書館を単に学生の研究場たらしむるに止めず、之を公開して世間の公益に資するの必要あるを信ず（義塾図書館の現状を述べ箇所は略す）図書館の設備斯くの如く不完全なるは実に教育上の一大欠点にして現在の設備中最も図書館の必要を感じる所以なり、即ち創立五十年の

記念としては図書館の建設を適當の方法と信ずるを以て広く有志者の賛助を得て、金參拾万円を募集し、本塾構内の適宜なる地を相し、一大図書館を新築して、慶應義塾創立五十年記念図書館と名づけ、義塾学生の研究に資すると共に、世間一般の閲覧者に公開することと爲し、建築費を支払ってなお余財あるときは之を圖書購入基金に充てんとするの計画なり。爰に聊か義塾の経歴と図書館の必要なる次第とを記し、偏に同情有志諸君の賛助を請うと云う」

この大文章はこの募金になみなみならぬ決意が込められていることを物語る。私学の存立は学生の学費だけでは賄えない。度々の寄附を有志者から集めねばならない。義塾の歴史を振返っても、先づ明治十三年に最初の募金が行われ、申込高は六万円であったが、實際収入は余程少なかった。次で大学部開設のために明治二十二年に十二万円、明治三十年に基本金として四十万円、福沢歿後の安定のために維持会が設立されて、一口が月五十錢、十年で六十円、これが明治四十年の計算で四千五百口、これが続けられると仮定して四十万円許りの金が募られた勘定になり、前後併せて九十万円の数字になる。近々二三十年の間の数字であり、その応募者は義塾出身者か、義塾に同情ある人々に限られている。度重なる募金がうまく成功するであろうか。鎌田塾長の本心は「中々何十万円の金が集まるとは思わなかった。十萬か十五萬かの金を拵えて図書館を建てようというのでした。」

ところが日露戦勝後の好況は募金状況を予想以上に好調ならしめた。十二月に発表されて翌年二月七日迄の受付額は十七万二千余円、二月末には二十一万五千余円、三月廿五日には二十四万円、四月末には目標額を突破して三十一万八千余円、六月七日には三十三万四千余円となった。応募額と實際の収入とは一致しないのが常であったから、引き続き努力は続けられ、大正元年の最終の決算では応募額三十六万余円であったが、実収は三十九万九千九百十五円五十

錢で、かろうじて予定額に達した。

高額寄附者は呉錦堂の三万円、福沢桃介の二万円、三井家の一万五千元、岩崎久弥、朝吹英二、徳川頼倫、酒井静雄、藤田伝三郎の各一万円がある。申込みはしたが支払わなかった人の中に鈴木久五郎がいる。俗称鈴木は明治十年生れだから三十歳の壮年であった。鈴木銀行の東京支店長であったが、日露開戦と同時に株式市場に乗出し、東株と鐘紡を買って進んで四十年にはその儲けは一千万円以上と噂された。鈴木が一万円の寄附を申出たのはその全盛の二月であったが、間もなく大暴落でその年の五月には世間から姿を消した。鈴木の名は花柳の巷では後世まで名を残したが、慶應義塾の寄附者名簿からは除かれてしまった。

ところが多額の寄附金が集る見込みが立つとなると、そこに一波瀾が起きた。図書館は木造とすれば十万円もあれば出来る。後の二十五万円で工科を拵えようという説が出て来た。もともと義塾創立五十年を記念する事業については工科説と図書館説の二説があった。工科建設は福沢在生の頃からある古い夢である。しかし到底工科を建るだけの金は集まりそうもないとあきらめて、図書館建設とした経緯があった。ところがあくまで工科建設に積極的であった浜口吉右衛門は、創立五十年記念式典の挙行された四月に工科建設寄附金と銘を打って一万円を投じたのが、この段階で工科説が再燃する切掛けになった。七月の評議員会でも図書館の建設場所が論ぜられるはずであったのが「態ト決議ヲナサズ、学科問題ト併セテ談合ニ止メ、他日ノ調査ヲ待ツ事トス」と議事録に記されている。学科問題というのは工科建設可否のことである。これから半年の間、論議がかわされたが、結局は元通りとなった。塾長鎌田の意見は「無条件で集めたならよいが、図書館を建てるというので寄附を募って置いて、金が沢山集まったからというの

で工科を建てるといふようなことをしては天下の信を失ってしまう。又木で以て図書館を建てるといふことは間違っている。図書館というものは不燃物で建てなければならない」と主張し続けた。そして翌四十一年一月やっと図書館建設資金寄附者への礼状が発送された。

図書館建設の場所も十二月の評議員会で決まった。「本塾寄宿舎ヲ約十九間西方へ移シ、其跡ニ本館ヲ新築スルコトヲ決議ス、而シテ新築費用ハ約二十万円、内部ノ設備費用ハ約三万円ノ予定トナスコトヲ併セテ決議ス」三田の山の上の建物の変遷は目まぐるしい。決定された敷地は初め福沢の本宅があった。それが明治九年頃東南隅に移った後は、幼稚舎がここに居を占め、明治三十年丘の下に移るまで存続した。その後はこの場所から北側一帯を木造寄宿舎三棟が建てられた。その寄宿舎を十九間西方にづらして図書館を立てようというのである。山の東北の一隅で最も眺望に富める地であり、同時に前面の品海に面する市街地からは好目標となり得る位置であった。しかし現在と違つてすぐ下の三田四国町は当時、中小工場の密集地帯であつたので、工場の音が喧ましかろうという批判もあつた。

資金は出来た。敷地も決まった。新築費用も二十万円と決定したとなると、建築設計への依頼であるが、その時はもう非公式に曾根達蔵工学博士に頼んであつたようである。そしてその橋渡しは当時の評議員会議長であつた荘田平五郎が口をきいたものであろう。荘田と曾根との関係は深い。荘田は義塾に明治三年一月入門し、永く教員をして福沢の信頼を得ていた。明治八年二月三菱会社に入社、緻密な頭脳をもって社則を作り、組織の近代化に貢献があつた。荘田の三菱における事業は数々あるが、最も努力し成功を収めたのは今日の丸の内街にビジネス・センターを建設したことであつた。明治二十三年荘田が欧羅巴旅行中、陸軍省が丸の内から神田三崎町へかけての土地を払下げる

との噂を耳にし、直ちに三菱本社に購入の必要を打電し、帰国後その建設にとりかかった。そして工部大学校造家学科を明治十二年卒業し、当時海軍鎮守府建築委員であった曾根を三菱に招聘した。曾根はそれから三十九年十月に退社する迄の十六年間に、丸の内全域八万坪の測量と地質調査から初まり、第一号館から七号館までの所謂、一町ロンドンと呼ばれる三菱の煉瓦街の建設を立派にやつてのけたのである。

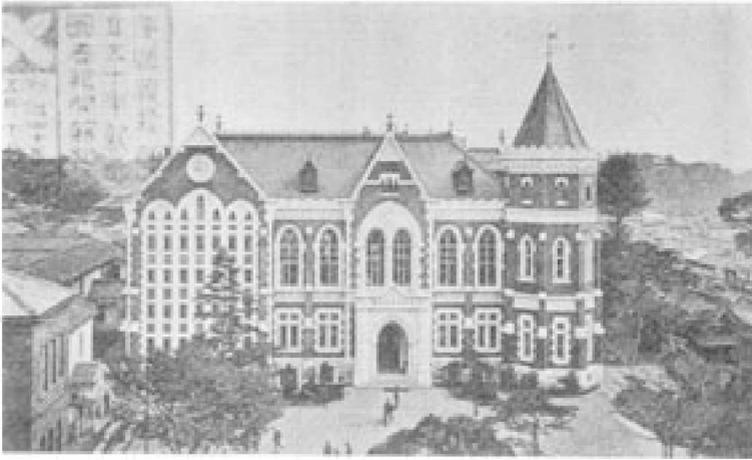
慶應義塾の評議員は名譽職である。出身校の隆盛を願わない評議員のないことは当然であるが、社会的地位の確立している面々の会合は得てして、回顧談や世間話に花が咲き、学校の事務的なことはすべて当局者まかせという人が多い。その中であつて荘田議長は三菱社内におけると同様に厳肅な態度で、手控えを開き「この問題をじっくり検討していただきましょう」といって、評議員一人々々の意見を聞いたという。荘田のこの熱意が創立五十周年を記念して建てる図書館、それは福沢歿き慶應義塾の学問の中心とも見做さるべき象徴的な建物となるように念願して、煉瓦館技術に実績のある曾根をその設計者に迎えたのであらう。

曾根は三十九年十月三菱退社後、建築事務所を開いていたが、四十年十月大臣官房建築課設計係長を辞した中条精一郎と協同して、四十一年一月丸の内に曾根・中条建築事務所をつくつた。建築設計依頼の正確な月日については、義塾側にも曾根・中条建築事務所の跡をついで現存している中条建築事務所にも、その書類が残っていないので良くはわからないが、曾根博士単独の建築事務所時代に依頼したのであらうことは色々な確証がある。明治四十年十月十七日発行の図書館雑誌に館員の竹内忠一がまだ建設地の位置はわからないが、設計は曾根博士に依託してあるといつており、十一月の評議員会で理事が設計案の説明をしている。田中監督は図書館の建物について充分な研究をしてい

た。依頼をうけた曾根もそれを充分理解していた。「書庫はブル氏式に更に新案を加えたるものにして、防火の一点に至りては、特に当事者が苦心せし所なり、其他の設備も資金の許す限り、斯界の最新式を採用して可成的完全を期せんとの計画なり」(竹内忠)しかし工科問題で決定は延び、設計案も幾度か書替えられて、曾根・中条建築事務所所にひきつがれることになった。

曾根・中条建築事務所によると「図書館をゴシック・スタイルにしたのは、別に先方の注文に依ったという訳では無いが、スケッチ、デザインとして十二三種先方に差出したが、最後に何か変わったものとの依頼にて此案を出したから決定になったのである」(建築雑誌二九九)図書館の様式については学校側に注文はなく、事務所側でゴシック・スタイルは真面目な建築に向いているところから、採用しようとしたもので、ただその選択に学校側は迷ったらしい。「何か変わったもの」という希望がでたのは、基金に予猶があったからと、五十年記念だから荘麗なものを造りたいということからであろうか。この最後案の設計は曾根でなく中条であった由である。ゴシックとはいうものの、中期の「稍デコレテッド・スタイル、即ち華麗式に則つとつたもの」に決定したのであった。

かくて明治四十一年十二月二十四日起工。まづ図書館敷地根切(地ならし)及び菱矢米建設に着手し、翌四十二年二月出来た。この間に工事請負人による入札が行われたが、予算二十万円を超過したので再度に涉り交渉が行われ、最後に戸田利兵衛が落札し、五月二十六日地鎮祭が行われた。そして地階の石積をおえた十一月二十三日、安礎式が挙行された。玄関右側に安礎石を位置せしめ、その左側に式壇を設け、卓上に石膏製の図書館の模型とその他の図面を配置した。式は午前十時鎌田塾長の式辞朗読に始まり、次いで社頭福沢一太郎が硝子蓋のある鉛箱の中に慶應義塾五



図書館開館記念絵葉書

十年史、同記念メダル、同記念絵葉書及び二十三日付の時事新報を入れたるを小穴に納さめ、モルタルにて塗り、上より安礎すべき石——長さ二尺三寸、横一尺一寸五分、高さ一尺三寸二分五厘の花崗岩——を曾根博士らに助けられて下し、周囲を密鎖して式を終えた。のうち二十五番教室にて立食があり、記念写真を写して十一時頃散会した。集まる者、塾関係者、教員、図書館員ら凡そ五十名、建築事務所側から曾根工学博士、中条、徳大寺両工学士、中村順平、小味亀十郎両技師らが出席し、職人には手当が支給された。かくして建築は本格的に進捗して行った。

四十三年一月、図書館内部の設備も曾根・中条建築事務所にかかせることが決まった。理由は建物の建築技師が内部も調製する方が便利であろうとのことであったが、結果的に見て成功であった。細部の装飾や什器がすべて建築様式と一致し、隅から隅までゴシック式が行き渡り、意匠家の親切心が行き届いていると好評であった。

四十四年秋、完成間近になったころ図書館の周囲の整備計画も同事務所にまかされた。正門及び石段、次で図書館脇の庭園——それは

図書館の地階から搬出された土で築山をつくった—などの設計が行われた。

こうして明治四十五年四月二日、図書館員の新図書館移転が行われ、四月十五日には戸田組より曾根・中条兩人立会いの下で建物の引渡しが目出度く終了した。翌十六日から学生の閲覧が初まり、開館式は五月十八日に行われた。

一一 八角塔のある風景

三田山上に聳え立つ新図書館の輪奐の美は人目を惹くに足り、五月十八日の開館式を俟たず、参観者が多かった。折から東京で全国校長会議が催されていたので、官公立の高校長や中学校長の見学が多く、又建築資金寄附者には建物を見せるばかりでなく、福沢諭吉の遺品、図書館所蔵の稀覯書及び塾員岡本貞然所蔵の古文書を展観したので、新聞記者初め多くの見物人がつどった。

さて五月十八日の開館式当日は天気良く、三田通りの商家も塾旗と軒燈とを飾って祝意を表し、新図書館を見上げながら登る坂の中途の正門は杉葉にて蔽えるアーチと変り、「開館祝典」の文字が浮き出ていた。新設の幅広い御影石の階段を登り、受付にくると案内状と引換えに記念品が渡された。「慶應義塾創立五十年記念図書館紀要」一冊と和田英作意匠にかかる記念アルバム及び田中松太郎撮影の絵葉書一組であった。式典は大閲覧室で午後二時から初まった。鎌田塾長の挨拶に初り、徳川頼倫の祝辞、徳川家達の祝辞(田中一貞代読)、次で日本図書館協会会長西村竹間の祝辞朗読、福沢社頭の謝辞と続き、最後に各地からよせられた祝文、祝電の披露があつて終了した。式後楽隊の奏楽裡に、図書館前にしつらえた模擬店に三々五々打つどい歓談したり、建物や展示場を見たりして散会したのは五時頃

であった。当日の来賓は八百名を超えた。夜は芝公園紅葉館で有志の懇親会が開かれた。赤羽の川を隔て芝増上寺の山内から見た丘上の図書館の偉容に、いづれもが快哉を叫ぶうち、六時を合図に図書館屋上に取付けられたイルミネーションが燦然と輝き、夜景の美しさもまた格別であった。集まる者七十名、歓をつくし九時散会した。

十九、二十日両日は一般公衆に公開され、特に二十日は綱町グラウンドで陸上運動会が催されたので人足が殊に繁かった。慶應の消費組合では記念アルバムを三十五銭で、絵葉書を十二銭で、純銀の記念メダルを六十銭で、更らに四十四年十二月現在の図書館蔵書目録を、和漢書は一円で、洋書は八十銭で販売した。径一寸八分の開館記念メダルは仏蘭西で薄肉彫の研究をした畑正吉の作品で「人物の柔かな高低の調子と之を引緊める劃然とした輪郭線とが気持好く纏って居る」(美術新報)と好評であった。絵葉書は学校以外でも二三種印刷され、三田街の書肆、文房具店などで売られた。イルミネーションはこの両日も点燈され、丘をつつむ三田一帯は昼夜賑わった。

翌二十一日は開館記念講演会が開かれ、鎌田塾長の挨拶、田中監督の新図書館の説明があった後、田中萃一郎、川合貞一、神戸寅次郎、気賀勘重、福田徳三の第一線教授がそれぞれ専門分野の講演をした。祝賀の日程はこれを以て終ったが、二十六日には第七回図書館協会全国大会が新図書館で開催された。北は青森の端より南は沖繩に至る全国の図書館員は百余名を数え、式後、「田中君の説明に煙に巻かれて感服」(内田魯庵「気紛れ日記」)しながら図書館を見物した。

さてここで落成した図書館の建坪や高さを「図書館紀要」によって示そう。

建坪 本館 二〇八坪
 附屬木造建物(便所) 七・四九一坪
 渡廊下共

階数	高さ	
	全館	地面より軒扶欄上端まで五〇尺
八角塔	前同	六二・五尺
避雷針	前同	九四・五尺
中央部	二階(外地階)	
東北隅	三階(前同)	
八角塔	三階(前同)	
書庫	四階(地階及屋階とも六階)	

材料及び構造は大体、石を交えた煉瓦造りである。壁体は煉瓦積とし、外壁は石材及び「テラカッタ」を交え、其切妻に当る所は特に鉄筋コンクリート造りとして薄煉瓦を張り、床は書庫全体と一階の或る部分を鉄筋コンクリート造りとした外は、悉く木造とし、屋根は中部陸屋根を銅板張とし、他はスレート葺であった。

間取りは書庫が館の西翼全部を占め、地階から屋根裏まで六階、凡そ二十万冊の図書を収容し得る。大閲覧室は書庫と特別閲覧室とを除いて二階の全部を占め、面積七十九坪四合七勺、閲覧者百五十人を入れることが出来る。事務室及び記念室は一階にある。即ち玄関を入ると広間があり、右に記念室、応接室、雑誌室、教員読書室があり、左に事務室がある。広間の突当りには大階段があり、登れば二階の大閲覧室に至る。そして地階には新聞室、製本室、喫

煙室、弁当室、小使室、汽罐室などがあり、木造廊下でつながった別棟の便所があった。

建物については当時新鋭の建築評論家黒田鵬心の批評がある（美術新報十一一九）

「扱て此の建築がゴシック式を採つた事は其の位置及び建築の種類から見て至極適當していると思う。元来ゴシック式は極めて構造を誇張したもので、しかもそれが垂直の方向を主としている様式であるから、之れを丘上に持つて来ると益々其の意味を強める事になるので、甚だ面白いと思う。学校建築又は図書館建築としても歴史的様式の内では最も適しているものの一であろう。勿論新様式の開拓と云う様な方面から見ても平凡極まるものであるが、ゴシック式建築として教え得るものが寥寥の星の如き東京市に在つて、斯る確りしたゴシック式の建築が出来た事は大に喜ぶべき事だと思ふ。又この建築はゴシック式と云つても其のいかつ味を去つてやや華麗の分子を加え、多少復興式の表現の心持があるのも、適當の加減だと思ふ。

正面の立面に於いて左右均斎を破りながら大体平均を失わないのはよいが、欲を云えば東西隅の八角塔は心持小さすぎはしまいか、尤も側柱を全部石にしたならば、あの大きさでもずっとよくなつたかと思ふ。そうすれば西翼の壁の石の部分の多すぎるのも補う様になる。何れにしても煉瓦と石との比例が右の塔と左の翼と釣合つて居らない様である。右翼の破風の下に時計を装置したのはまづ無難と云つて置こう。建築の威厳と云う点からは面白くないが、思付から云えば面白い。屋根の格好は簡単なのが余には何より快い。何かと云うと不要のものを失鱈に附けたがるものだが、これには其の嫌いが無いのが嬉しいのである。入口は非常に美事に出来た。入つたところの広間の大理石の柱と三つ並んだ、ポインテッドアーチも立派、そして其の突当りに大階段のあるあたりは誠に堂々たる大建築—日本

に於ける——の観がある」

少しく補足するならば西翼の壁に石の部分が多くて八角塔の煉瓦と鈎合はないというが、西翼は五階の書庫であつて、それにつけられた蜂の巢のような小窓が、中央部閲覧室の大窓と鈎合わないのを調和するために、多数の小窓を三個の石の大アーチ形にはめ込ませたからであつた。右翼破風下の時計は花崗石の外輪の中に、白藍褐三色の陶器を張り、文字盤には数字に代えて「TEMPUS FUGIT（光陰矢の如し）」の文字を配した。大さは外輪の石を入れ直径七尺、製作者は仏蘭西セーブルで特にこの種の彫刻を研究して来た美術学校教授沼田一雅で、中におさめた機械は天賞堂が特に英国より輸入して寄附したものである。美事に出来たという広間の大理石の柱は秩父産緑色大理石で、双柱八本により三連尖頭アーチを型造っており、突当りの堂々たる大建築の観がある大階段には将来和田英作図案のステインド・グラスが出来る予定で、開館当時は板硝子が嵌込まれていた。黒田の文章にはないが、正面玄関石造アーチには「創立五十年記念慶應義塾図書館」なる篆字を山本拝石が揮毫し、青銅にて鑄たるものが掲げてあつたし、玄関の広間左手には四十二年秋の文部省美術展で注目を集めた北村四海の大理石像「真間の手古奈」が据え置かれ、記念室には川村清雄画く福沢の肖像画が清岡邦之助が寄贈して掲げられてあつた。

後日のことになるが、この建造物は其後関東大震災及び第二次大戦の戦火に遭つて、増築され改修された後も、当初の佛を残しているもので、昭和四十四年三月十二日文部省告示第三六号で重要文化財に指定された。

「慶應義塾図書館 一棟 煉瓦造、建築面積六八四・四平方メートル、二階建、地下一階、一部三階、書庫六階、亜鉛引鉄板葺（正面玄関広間、階段室以外の内装を除く）」

附 設計図 六五枚

ステインドグラス原画 一枚

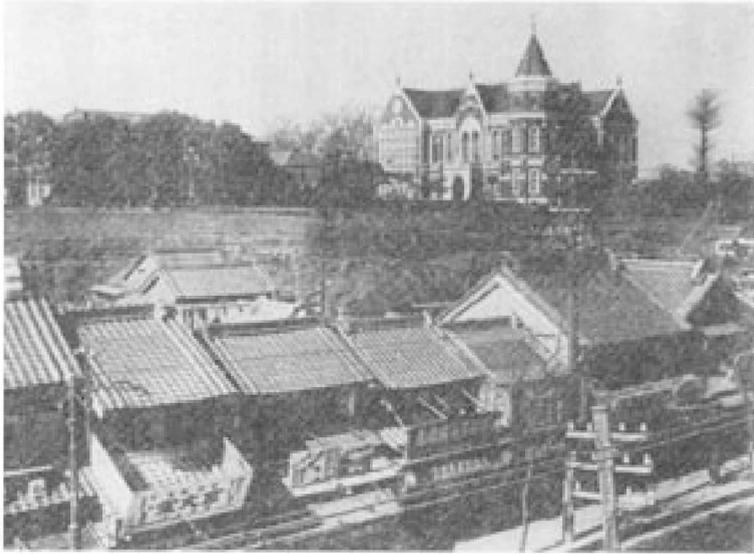
文化財としての意義を保護委員会の会員の一人である谷口吉郎博士はこう語る。煉瓦建築は外国では紀元前数千年のバビロン、アツシリヤ以来、今日なお建設されているのに、地震国である日本では幕末に伝来されて以来、明治、大正を以て終焉されてしまった。日本の煉瓦造は全く歴史の一片にすぎない。しかも残存したのも、地震で倒れ、戦災で潰れ、さらに戦後は心ない人の破壊で姿を消して行く。「それ故、今日姿を保っているものは稀少中の稀少品となり、慶應義塾の図書館はそのうちの一つに属する。意匠もすぐれているので、建築史の貴重品といわねばならぬ。」又、文化庁主任文化財調査官橋本文雄も、明治の洋風建築にも初中後期とそれぞれ異なる。従来の日人大工が洋風建築をまねた時代から、外人の指導で建築した時代、最後に日本人の手により設計し施工した時代に推移した。この図書館はその明治末年に竣工した「一級作品」であると推賞している。

建築構造の確かさ、造型の美しさは建設当初より今日に至るまで変らない高い評価の下にある。しからば図書館建築としてはどうか。図書館建築には当事者と技師との緊密な協力が必要であることを常々力説していた田中監督は、竣工後の講演会で「記念図書館建築の特色」（学報一七九号）と題して演説し、便利、防火、発展、採光、通風、美観すべての点で満足であるといっている。

田中監督の便利とする処は先づ閲覧室と書庫、事務室と書庫が壁一つ隔てるのみだから、出納には時間がかからず、事務にも便利である。ところが高さ七尺の書棚を入れた低い階層の書庫と天井の高い本館との床面は、一階と二

階では差違が出来る。それは貸出台を閲覧室内に高く突出すことよつて不便を解消した。そして目録は貸出台の左右に置き、木製の屏風で閲覧室と区劃した。左右に置くことよつて閲覧者の往来を少くし、屏風の異動によつて目録台の増加も加減出来た。書棚の七尺の高さは誰でも手が届く。今迄のような梯子や踏み台がいらぬ。そして配列法にも工夫をこらした。書庫は分房されていたので、分房内には大分類のものを入れ、その中は図書の大小によつて配列された。つまり分類別と図書の大小による配列法の折衷を採つたのである。分房毎に机があり、照明暖房設備もあつたから、書庫内に入出出来る教員には便利であつた。又地階は荷車を引入れ、荷解きをして直ちにエレベーターで事務室や貸出台へ容易くあげる工夫もしている。防火のことは最も意を用いた処であつて、書庫を分房にしたのもその爲であつた。真中に廊下があり、左右に分房があつた。その間に防火壁があり、床は鉄筋コンクリートで固められ、入口及び窓は鉄扉で遮断された。階段やエレベーターは廊下にあつたから、失火があつたとしても延焼は防ぎ得る。採光は丘の上にあることよつて想像以上の明るさであり、通風も南北に窓があつて風が通り易い。以上のようなことが田中監督の自慢とするところであつた。

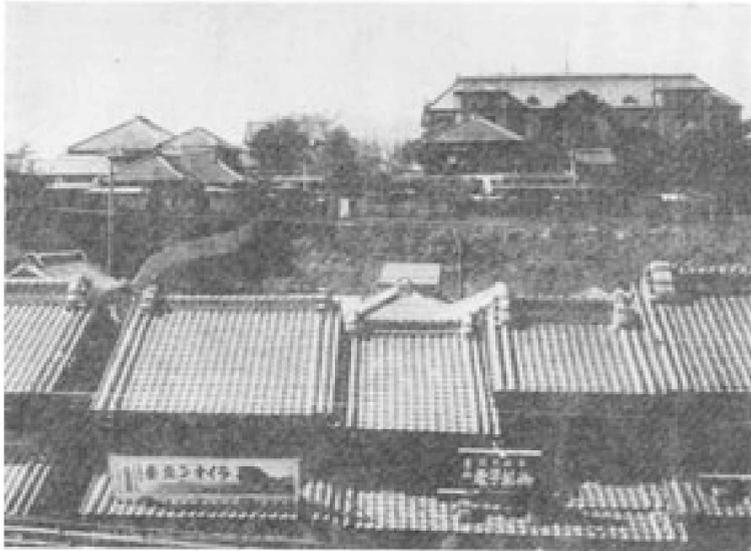
これらは勿論、造られた時代を考えねばならない。当時の他の図書館との比較においていわれたことよつて、其後の運営によつて不都合になり、変更されたこともある。いや殆んど全部が変わつたといつて良いだらう。そこに図書館の進歩があり発展があるのだといえる。防火は田中監督の最も意を用いたところであり、自慢の種であつたが、屋根を鉄骨木張りにスレートを葺いたことが後に戦災で焼ける原因になつた。内部からの火、横からの延焼を恐れたのであつて、空からの焼夷弾には流石思ひも及ばなかつた。尤も戦災は書庫は屋根裏だけにとどまつて、四十万冊の図書が無



煉瓦講堂、校舎、福沢邸。大正の町家の屋並みが美しい。

事だったのは防衛した教職員の努力の外に、田中監督の神
経質すぎる程の分房主義のお蔭であったことは確かであ
る。

この新図書館が出来たことが、どんなに塾当局、塾出身
者、塾生に満足をあたえたか、想像を絶するものがある。
福沢在世当時の、新銭座から三田に移し立てられた古長屋
や、苔蒸し軒傾きたる島原藩邸の校舎や寄宿舎は除々に建
て替えられ、新講堂や寄宿舎や商工学校などが次々に出来
たが、それらは皆木造の建物であった。新日本に貢献があ
った福沢の流れを汲む学校としては物足らぬ気持ちを持
しもが持った。学生榎智雄は「当時、本郷の帝国大学の校
庭と建築物が、よくわれわれの頭中に往来した。学問はあ
んな雰囲気の中で育つてであろうと考えられるのであった：
図書館の新築は、それ自身立派であるとともに、将来への
希望を思わせるものがある、われわれ学生の志気を、どの
位高揚したか量り知れぬものがあった。」(三色旗二二六号)



三田通りから丘の上を望む。右から図書館、演説館、

そして亦、この図書館は「慶應義塾出身の人達及び世間の塾に同情を寄するところの有力者が金を出して之を造ることが出来た。是が又大変尊いことである。」(鎌田栄吉「私学の発展」学報一七九号) 政府からは鏗一文の金を貰ってない。開館式の祝辞に政府の高官が一人も壇上に立たなかった。独立自尊はお家の家風、義塾の学風である。自由なる学問の場、これは自由の中において自由に育ったものより、他校から来た者の方が敏感に読みとれる。一ツ橋の高等商業学校出身で塾の教授となった福田徳三は、開館記念演説会の席上で「幸に吾々は慶應義塾に於て学問を研究するには、政府の干渉も無ければ、実業家の束縛も受けず、政治家の圧迫もない。全く自由にして而も斯の如き立派な新築図書館を与えられて、書物の数は少いが、勉強しようと思えばイクラでも出来る」(学報一七九号)と演説した。

図書館は創立以来、今日に至るまで義塾の象徴の如く愛されて来た。塾に關係のある図書、雑誌の、表紙に、挿

絵に、絵画で、木版で、写真で親しまれている。その建物から来るイメージがまた慶應義塾のイメージの如く思われさえもする。慶應は華麗^{ヘデ}だ、華麗な学風^{ヘデ}だといわれるのも、この建物の印象に由来することがあるかも知れない。

終りに実務的な数字を付加えて置きたい。図書館建築費は二十三万六千九百八十七円三十三銭七厘で、予算二十四万円を目出度く内輪で済ませた。尤もステインド・グラスが未完成ではあったが。又、建設に功労ある図書館員には特別賞与があたえられた。田中監督には千円、東野主任には月給の二ヶ月分、その他は一ヶ月分であったという。

三 新図書館の運営

慶應義塾創立五十年記念図書館の開館式が行われた明治四十五年五月が、慶應義塾図書館の公式設立年月となった。その後、毎年行われた文部省や東京府の図書館調査の答申には、常にそう記入されつづけた。独立建物の図書館を持って、初めて学内からも世間からもそれを認識されたのであろう。慶應義塾図書館の本史はここから初まるといっても良い。

田中監督の就任から新図書館建設までの努力は見て来たとおりでである。そして建物の完成からも休む閑暇なく、その充実と活用に努力を重ねたことは今日から見て超人的とさえ思える。田中の図書館観を示す良き資料がある。塾員津田栄にあたえた書翰の一節に「学風なく感化力なき学校や、生気なく活動力なき教会は、教育機関宗教機関として何等の価値なきと等しく、図書館の如きも書籍を死蔵するのみにては、是只紙屑屋と同じく何等取る処あるなし。実際図書館は死せる書籍の推積せらるる処なりとの誤信よりして、人々自ら其活動的方面を忘れ、只是れ紙片を葬る墳

墓の如く見なすものあり、若し図書館にして生命なく活動なき只雜然たる倉庫の如きものならしめば、是社会の機関たる資格なきものと云はざるを得ず。書籍は元米紙片の集合に過ぎずと雖、学者の最も精選せられたる思想感情は此処に沈澱せらるるもの、此点より観る時は書籍其ものは実に一大生命なり、而して此一大生命に活動を与え、以て多数の読者をして智識を啓発せしめ、延て社会に貢献する処あらしむるには、専ら図書館の経営者に待たざるべからず。要するに書籍其者の力は所謂潜勢力なるが故に、単に蓄積せられたる書籍は直接に何等の効果なきものなれども、経営者の力によりて始めて顕勢力と化し、其活動を開始するものなり」岸和田に津田文庫と称する小図書館を經營せる彼の後輩に激励のためにあたえたこの言葉は、彼の抱負であろう。田中は図書館の仕事に誇を持って働いた。

新図書館の閲覧は開館式を待てず、四月十六日から初められた。その規則は煉瓦館時代を大して変更することなく、寧ろサービス過剰を訂正した程度であったが、大いなる変革は建設趣意書でも發表した「単に学生の研究場たらしむるに止めず、之を公開して世間の公益に資するの必要」の実行であった。それは十一月一日より行われた。外来閲覧者心得には「一入館せんとする人は玄関左側の地下入口より入り、本館備付の草履に履き換え、中央階段を経て閲覧室に入らるべし。一入館せんとする人は成るべく平日は午後二時以後、又は日曜日を扱ばるるが双方の便利なり」と注意した。尤も丁年以下の者、若くは服装の余りに如何はしき者は謝絶した。入館料は一回五錢、一ヶ月一円と定められた。この月の外来者は百五十四名で、(一日平均五名)内訳は学生が百三名、他は月給取^{オクリアゲ}であった。学生の中では東京帝大生が多く、高等商業学校がそれについだ。外来者は以後一日平均三名から七名程度であつて、特に煩雜の感はなかつた。なお建築寄附者には特別閲覧券が発行され、無料で利用させた。大学図書館の公開は慶應ばかり

でなく、早稲田でも行われたが、今日に至るまで止むことなく続けられたのは義塾図書館だけである。戦後学生数が多くなると外来者の扱いにも面倒が生じ、若い館員には学内だけのものになるうとする動きもなくなかったが、却って松永安左衛門とか森村市左衛門とかいう古い塾員の間に、公開が当然だという空気が残っていた。福沢の生きていた頃、三田演説館が塾生ばかりでなく一般に公開され、植木枝盛などもここで思想の成長を培ったといわれるが、福沢以来の塾の輝かしい伝統をこの公開にも見ることが出来るといえよう。

大正二年から三年春にかけて田中は塾長鎌田に同行して欧米の教育視察に出かけた。その帰朝土産は月次展覧会の開催である。公開書架オープンシェルフが米国の図書館で行われて、多数の学生が図書に親しんでいるのを見て、月一回、一週間位、一定目標の図書と雑誌類を多少の参考品と共に展示し、学生並に一般外来者に自由に観覧せしめた。そしてそれは大正三年十月から十一年二月まで三十三回行われた。第一回は軍事、第二回は都市、以下金融、交通、英文学、社会思想という風につづけられ、後にはその一日を講演会にあてた。図書・参考品は塾内に限らず広く有志者の賛助を求め、几帳面に永続させることは大変な努力であった。この外にも「問題の人と著書」と題し、時局の内外人の肖像と図書を閲覧室に適時陳列した。

田中監督は就任当初から図書のPRには熱心であり、「慶應義塾学報」にはその記事を欠かすことなく掲げた。初めての印刷された蔵書目録も二回に渉って発行した。大正年代になってそれらを総合して一冊に纏める年報を出すことになった。正式の名称は「慶應義塾図書館年報 附増加図書目録」という。大正五年度に初まり十年度まで六冊発行された。増加目録はその年度だけの図書に限るので、既刊の印刷目録との間の空白は、洋書はタイプライターで、和

漢書は筆写の増加目録を作つて補つた。なお大正八年度以降の年報には医学部の前身である医学科の図書も附載した。医学科予科は三田にあつてその参考図書は図書館に収蔵されたが、本科は四谷にあつて図書は各教室に分散されていた。それが纏つて全部収録された。

地味なことであるが、分類の一部改訂が明治四十四年と大正四年とにあつた。三十九年改訂によつて和洋共十門分類であつたのが崩れて、四十四年には和は十一門、洋は十五門となり、大正四年には更に増えて和は十三門、洋は十六門となつた。和の増加した三門は教育、社会問題、雑誌であり、洋はその上に語学、伝記、地理が加わつた。和洋分類の規準の差違の発生はどうした理由か寡聞にしてわからない。経済から社会問題が分離したのは当時の風潮からその方面の図書が増えたのと、福田徳三の意見が参考になつたようである。福田は性格が強く主張するとあくまで自説をまげない。和洋分類の差違の生じたのは教授達の主張の反影からであるらしい。しかし分類を変更して索引の便を図ることは大切であるが、カード許りでなく函架の上になつて変更があつて、煩瑣な仕事をともなうことは図書館に勤務した人でないとわからない。それを二度まで繰返した努力は大変なことであつた。

大正六年七月の評議会で図書館に相談役を設けることが可決された。それは図書館の改良進歩のために教員の意見を聞くためであつた。最初の相談役は三辺金蔵、西村富三郎、沢木四方吉、幸田成友、占部百太郎の各教授で、相談に預る主なことは図書の管理及び撰択に関することである。第一回相談役会は監督司会の下に石田新太郎幹事も陪席して開かれた。大正七年度の図書購入費六、三六〇円を従来の決算に照して、分類別に予算を定め、相談役各自が得意の分類項目の図書を選定するということになつたが、こんな面倒な仕事を手当もうけない相談役が引うけて永続し

たであろうか。おそらく、従前のやり方にまもなく戻ったことであろう。これ迄の図書選定は項目別の予算を監督と館員が協力してやっていた。特に教授達の推薦書に主きを置いて、その受付係は東野主任が当っていた。福田徳三などは特に熱心で洋書ばかりでなく、専門違いと思える図書を浅倉屋や文行堂などの古書肆から送らせていた。その頃あまり人の注意を惹かなかった水帳や宗門改帳など、今日の庶民史料を推薦して来たこともあった。そこで或教授は福田を「紙屑買」と罵ったのを、どこからか聞いた福田は「横文字さえ入っていれば葉のレットルでも有難がる奴」と応酬したという逸話も残っている。

大口の臨時図書購入費は教授に相談し、若くはその推薦によるところが多かった。新図書館完成のための蔵書充実に、初め一万五千円が予算外に準備された。基礎資料の購入をという事で慎重な撰択の結果、福田の推薦によるアダム・スミスの国富論各版揃一式百五冊（但三版を除く、三版は後年補充）が採用され、海外研学旅行に出発した堀江一教授が英国の古書肆ミューゼアム・ブック・ストアにわざわざ立ち寄って、該書を確かめ発送したのであった。又、大正五年十二月門野幾之進還曆祝賀のため集められた拠金の残額二千八十円七銭の寄附があったときは、高橋誠一郎教授の推薦によって前記と同じ古書肆から、東印度会社関係資料一括二百七冊を購入した。

またこの頃は洋書の購入を留学生に依頼することが屢々あった。第一次大戦のとき各国政府の公文書類を収集するため、大正二年出発の小林澄兄にそれを依頼したが、専門外でわからない。ロンドンで三辺金蔵に遭い、頼んだらそれらと共に会計学の図書も多く買って田中監督に渋い顔をされたそうである。留学生による事後承諾の図書購入は三辺のみでなく、早くは神戸寅次郎などにもあって、評議員会で釘をさされたこともあった。欧州大戦中は洋書の入手

が困難で、殊に独逸書の輸入は官立学校に限られていたから、留學生の活用が盛んに行われた。

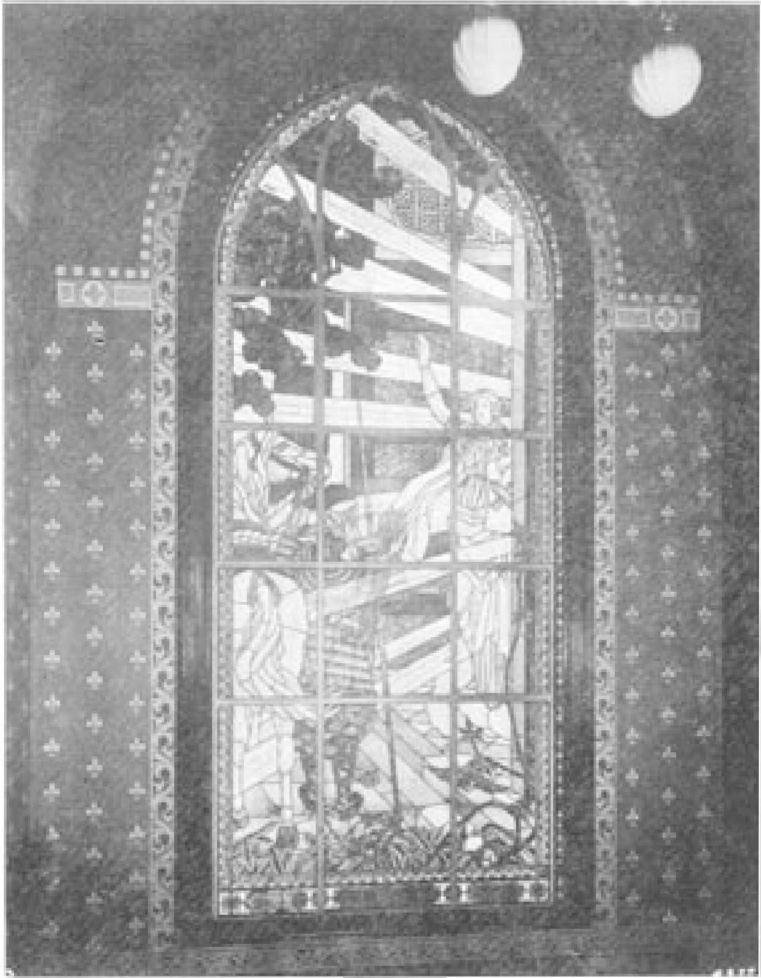
この頃の委託書と特色ある寄贈書に触れて置きたい。四十五年九月、新図書館が出来てすぐ、在日欧米人のアジア研究の会であるアジア協会の図書約三千冊が委託された。同文庫は欧亜関係の古書が多く、特異なものであった。大正二年岡本謙三郎の遺蔵書二百四十六冊が父岡本貞然の手で寄附された。貞然は古い福沢門下、謙三郎はその次男、英文学を志して留学し、帰国して教壇に立ったが早逝した。財界に知己の多い貞然は「ぐうたらな長男が残り、秀才の次男に先立たれて気の毒」がられたが、その長男とは俳句で名をなした岡本癖三酔であった。同年津田弘道よりその父真道の遺蔵書七十冊が寄附された。真道は文久二年西周と共に和蘭に留学し、寄贈された図書はその時持帰った和蘭政事学の書であった。真道は福沢と共に維新前幕府に仕え、親交があった。維新の時、主戦論側に立ちながら、新政府が出来るといち早く出仕したので、福沢から「かけまくもぐみ」と揶揄され、明治以後必ずしも仲が良かったわけではなかったが、永い生涯を振り帰って見ると罵り合った福沢がなつかしく、慶應への寄贈は真道の遺言であった。大正四年木村浩吉から先孝喜教所蔵品の寄贈があった。喜教は万延元年福沢渡米の際の司令官で、以後親交を続けた。この時の寄贈品は自筆の「奉使米利堅紀行」を初め、数々の将来品である。大正六年井口榮治より伴鉄太郎の遺蔵和蘭書十数部の寄附があった。伴も万延渡米の一員であり、福沢旧知の人であった。同年渡辺金蔵所蔵朝鮮本三百四十六冊、和歌書千七百余冊の委託があった。渡辺は刀水と号し当時陸軍中佐、非常な蔵書家であつて斯界垂涎のものであった。和歌書全部と朝鮮本の一部は後購入した。大正七年井上勝之助遺蔵書六百五十冊が寄贈された。勝之助は明治の元勳馨の遺子で永く大使として外国にいた。寄贈書中には馨の旧蔵書も含まれている。同年には安倍能成

から日本の医書三百十八冊が寄贈され、高杉春太郎から漢籍九部百三十七冊の寄贈もあった。祖父晋作遺愛のもので、その手沢本も混入している。十年には小寺謙吉より独逸書七百七十二冊が寄附された。

新図書館開館の際、福沢及び義塾関係者の資料展が行われたが、見るものの感懐を呼び、その方面の資料を収めようとする高まりがあった。図書館側からも今にして収集せざれば煙滅に帰すべきを慮り、古い卒業生に呼びかけて蒐集につとめ、草稿、書幅、書翰等続々寄贈された。又、福沢の創刊せる時事新報も神長道之介、森五郎兵衛、小森沢祝三、川俣直次郎などより寄贈をうけ、創立より廃刊まで、更らには時事を合併せる毎日、産経をも揃えて所蔵し得る端著を作った。

図書館内にも多少の変化がある。落成時に硝子板であったステインド・グラスが大正四年十二月に完成した。大正五年には書庫内の教員読書机は狭いというので、玄閑入ってすぐ右の従来学生雑誌室を改造して教員閲覧室とした。玄閑広間は手古奈像のみでは寂しいとして、義塾功労者の胸像が据付られた。小幡篤二郎、門野幾之進、鎌田栄吉の大石像が四年から六年にかけて北村四海の手で造られた。福沢の肖像も河村清雄のみでは寂しいとして、五年二月多田良吉に依頼して壮年の風貌をもつ肖像を画かした。これらの変化のうちの最大の話題は勿論、ステインド・グラスであらう。

それは高さ三間半、幅一間半の尨大なもので、これ迄は外国の写真でしか見られなかった日本では劃期的な企劃であった。田中監督の発案により、鎌田塾長が意とする「泰西文明の移入による我国従来のみリタリズム・フューダリズムの没落を示す」構想を、田中が巴里で知り合った和田英作に依頼し、考案させた。構図の出来るまでには十数枚



ステンドグラス

の画稿が、書き替えられた。初めのうちは大勢の人数を配して泰西文明に直面した幕末の新旧思想の混乱振りを表現せんとしたが、次第にその散漫さを避け、二人の人物にまとをしぼった。甲曾に身をかけたためた武士が馬より降りて、自由の女神に対する構図となつたのである。和田の談話によると「図は今、封建の門扉を

パッと開いて旭日燦たる光とともに、泰西文明のシンボル女神が、熟章ペンを手にして入って来るところ、弓矢を持ったミリタリズムの表徴たる鎧武者が白馬を降りて迎えている。下方に叢生しているのは笹や茨棘で、今後泰西文明に依って開かれようとするカルチャー少き荒野の様、女神の足下に飛立っているのは梟で、旭日の光から遁れて暗きに去るもの、凡て我国近代文明の暁を示す姿である」(三田新聞昭和五・二・四)そして下部にはラテン文 *Calanus Galis Fortior* (ヘンは剣よりも強し) とその左右には義塾の創立年と五十年記念の年号が記された。

この図案をステインド・グラス専門に研究して米國から帰ったばかりの小川三知が、田端の工場で製作した。グラスは態々米國から取り寄せ、下絵の色彩を出すのにグラスを三枚四枚と重ねたところもあったという。小川談によると「下絵を見た時、何式に為様に就ては、構図の性質や材料、即ち私の手元にある色硝子の都合もあったのでチフアニー氏式に適すると見て仕事を始めました。然し廻の椽模様は全くモザイク式に依りました。」(建築一九二号) 小川は大正三年五月に仕事を初め、専心しているうちに興に乗り、遂には経費や労力など念頭から去る程熱中して完成した。大さといい、技巧といい、当時の日本人作品では抜群の出来栄えと言われ、仕上げの意匠は河辺正夫が苦心し、青い壁面による稍々薄暗いホールから、階段に面するとき、この色彩眩ゆいステインド・グラスには恍惚とした崇高さにうたれ、学問の深奥にわけ入ろうとする大学図書館の入口にふさわしい雰囲気をかもしした。

四 田中監督の晩年

大正三年十一月六日慶應義塾図書館で臨時日本図書館協会の総会が開かれ、協会長に田中一貞が選出された。太田

為三郎会長が台湾総督府図書館の招聘に応じたために、急拠總會が開かれ、会長におされたのである。協会長は創立以来七代目であつて初代は田中稲城（帝國図書館）次で和田万吉（帝大図書館）市島謙吉（早大図書館）渡辺又次郎（日比谷図書館）西村竹間、太田為三郎（共に帝國図書館）に継ぐもので、図書館の数多からざる当時にあつては止むを得ないものがあつたろう。田中は「図書館については素人であつて」を口ぐせにしていたが、推選された上は協会に積極的協力した。それから二年の間、慶應義塾図書館が協会の本部になり、幹事に東野利孝、西村敢が任命された。

協会は初め日本文庫協会といつて明治二十五年に創立された。会員は官立図書館に属する人々を以て構成され、私立図書館員や蒐書家好書家の加入は遅れた。慶應図書館員がこれに加入するようになったのは、はっきり判らないが、恐らく田中になつてからではあるまいか。田中は明治三十九年三月の第一回全国図書館大会には出席して、前述のように図書館の建築に関する講演をしている。そして四十年創刊の「図書館雜誌」にも委員に名を連ねた。四十二年協会名が日本図書館協会と改められた第三回全国大会は、本会議は南葵文庫が行い、二日目煉瓦館時代の慶應義塾図書館を参観し、三田の東洋軒で懇親会を開いた。四十五年第七回全国大会は新築成る義塾図書館で行われ、出席者も初めて三ヶ台の百三十七名となつた。協会長就任の頃の田中は、慶應の図書館も創業期をすませ、充実期に入つた一番油の乗つた時期にあつたと思う。元より順番の会長であるから、田中でなければ、というようなことはなかつたが、この間良く勤めたといつてよいだろう。全国大会を大正四年には九州で、五年には山形で開催し、卒先しで出張した。山形は田中の出生地であつて、徳川譜代藩の名残があつたので、協会総裁に元紀州家の徳川頼倫と共に来るとあつて、歓迎の幔幕が張りめぐらされ、とんだところで故郷に錦を飾る結果となつた。大正二年八月には慶應

で第二回図書館事項講習会が開かれ、一切の費用を引受けた。後々まで図書館員の良きハンドブックとなった「図書館小識」も田中会長時代に発行された。田中が会長で特に田中でなければ出来なかつたことは協会の総会の講演に和田英作に「蝶翅上の色彩につきて」を、中村不折に「古法帖に就きて」を喋らせたことにあるだろう。総会に美術家を講演に招いたなどは後にも先にも無いことである。

田中監督は塾の内外に涉って活躍されたが、この時期の図書館員について触れて置きたい。大正七年度に於ける主な館員と職務分担は

- | | |
|--------|----------------|
| 東野 利孝 | 図書購入、予算、庶務 |
| 竹内 忠一 | 洋書の分類、目録、月次展覧会 |
| 安食 高吉 | 和漢書の分類、目録、製本 |
| 等原嘉次郎 | 教員貸出、新刊書報告、雑誌 |
| 佐々木良太郎 | 図書原簿、目録排架、書庫 |
| 伊達 良春 | 洋書目録補助 |
| 岡崎 義元 | 和漢書目録補助 |
| 楠山多鶴馬 | 庶務係補助 |
| 山木徳三郎 | 学生貸出 |
| 外島 政寿 | |



四 田中監督の晩年

閱 覧 室

これらの館員は勤続が永い。それが田中監督より前の時代の人との差違である。この内東野と竹内は田中の股肱であった。東野は初め恵海といい、滋賀県伊香郡の出身、真宗京都中学から真宗大学中退、上京して東京物理学校に入り、明治三十七年九月平山幹次在任のころ慶應義塾書館に就職した。職務の傍ら慶應の文学科に学んだが卒業はしていない。四十年の三月、慶應義塾創立五十年祭を前にし、図書館の募金も初まる繁忙のとき、田中監督の下に主任を拝命した。真面目な人であり、図書の注文には教員との交渉も頻繁だったが、評判も良かった。後年、慶應から去った福田徳三は小泉信三宛の書翰の中で、東野の名を記して図書館を懐しむている。図書館協会幹事のときも実務に挺身し、やめるとき徳川総裁から感謝されている。大正七年病気で郷里に帰り、八年八月退職した。退職後は高月町馬上の円照寺の住職となり、大正十四年五月歿した。竹内は愛知県知多郡の人、明治廿四年上京、慶應義塾文学科卒業、

年齢は東野より七歳上であった。就職は明治四十年、図書館最初の専任洋書係である。十二年間勤務して、東野と殆んど同時の大正八年十二月に退職した。安食高吉は明治三十八年四月まだ文学科学生中に就職し、四十四年卒業して事務員となり、翌年兵役で一年退職したが、大正二年十二月再就職した。田中と同じ山形県鶴岡の人、初め和漢書係であったが、東野の後を継いで主任になった。田中監督は郷里の人を多く使用したと前に書いたが、言葉のなまりが何時迄も抜けなかったのは安食を最とした。その頃の学生の投書に「図書館の事務員と話をするには通弁を要す。あれなら反って外国人の方が判りよし」と云われたのはこの人であろう。

この外に筆写生が一人いた。前記した羽柴雄輔であり、大正四年頃一時いた人に神代種亮がいる。二人とも世間では割りと名の知られた人である。筆写はこの頃の図書館では重要な仕事であった。今日でいえば写真であろうが、他所にある珍本、稀本類を筆写して所蔵本としたのである。筆写は以上の二翁の他、まだ寺子屋の経験ある人が多かったので筆を持つことは慣れていて、館から委嘱されて筆写を内職とする人が多かった。そうした筆写本に今日価値のあるものがある。例えば麻布にあった南葵文庫所蔵本は、その主任橋井清五郎の好意で多く筆写し得た。ところが南葵文庫は其後、東大図書館に寄贈され、大震災で全部を失ったので今ではそれらの写本が残された唯一のものとなった。

この外に雇員、給仕、小使がいたが、大学図書館独自の勤務者には教員の席が明くのを待つ間だけ勤めるもの、助手になっても教壇にまだ立てなかつたものなどが活用された。それらには後に有名になった教授がいる。まづ前者には西本辰之助、沢木四方吉、山崎又次郎などがおり、後者には高橋誠一郎、増井幸雄、野村兼太郎などがいた。「私

は図書館へは仕事に行かなかつた。助手になつても何も仕事がないので石田幹事にいうと、それぢや図書館に行けと
いって手伝わされる。高橋さんも野村さんも行ったが、私と加田(哲三)さんは行かなかつた。高橋さんは月給四十円
だったが、図書館へは一日置きに行くことにしたら、月給は半分で良からうと云われたと笑話で話された」とは園乾
治教授の話である。田中監督はこうした若い人を東野、竹内を中心に、巧みに挿入して図書館を充実させた。しかし
短期間勤務なので随分無駄も多かつたようである。

大正八年十月ワシントンで開催の第一回国際労働會議に塾長鎌田は日本政府正式代表として出席することになり、
氣賀勘重、高城仙次郎と共に田中一貞も随員の一人に加えられた。そして翌九年一月帰国した。この會議での心労も
あるであらう、又四月に九十才になる老母の病氣も影響したことであらう、十月頃から神経衰弱が昂じて不眠症に悩
むようになった。

十年の夏には青根温泉に憩い、又松島湾内の桂島に休養をとつたが、既に死を覚悟してか、「如空庵嘯月一貞居士」
と自ら諡した。如空庵とは桂島にある小屋の名、嘯月は雅号であつた。九月帰京し、時々図書館にも来て談笑し、死
去の前日の二十一日も八角塔の地下室の食堂で昼食後、菓子を饗し、自から人にすすめなどしたが、翌二十二日午前
九時、突如脳溢血症にかかり、午後六時死去した。享年五十歳。臨終手記には「義塾の益隆盛ならん事を望む。看護
に就ては一点の不平なし。只感涙あるのみ。今年三月より殆んど全く催眠薬の為に眠る。精神の疲労想うべし。妻の
看護と誠意の為に生延たり。家庭に於て余は幸福なり」と断続的に記されてあつた。

九月二十四日北寺町大松寺にて告別式、十一月には故田中一貞教授記念図書購入資金募集が、石田新太郎他八名が

第三章 五十年記念図書館

発起人となつて醸金されたが、これは予期ほどの反響がなかつた。この頃は図書館熱がややさめて、医学部の建設や
ら研究室圖書の充実の方に人々の関心が集まっていたからと思われる。翌十一年一周忌に親友中村不折画く肖像の油
絵が出来た。小品であるが気品に富み、閲覧室に掲げられて、学生の読書を永く見守っていた。

最後に大学図書館としての程度の規模であつたかを他の図書館と比較した表を掲げよう。幸に文部省の「全国図
書館に関する調査」(大正十一年十月)がある。

	大正十年度経費		蔵書冊数		閲覧人員	
	設立年月	総額	和漢書	洋書	大正九年度 延人員	一日平均
早大図書館	一五二〇	三六、六七一	一八一、一三三	四八、二六九	一一五、五五五	三六三・〇
明大図書館	三〇	九一五、〇〇〇	一八、六七四	八、一〇七	四、〇九三	一〇三・〇
慶應図書館	四五	五二七、八八四	六六、〇七三	三七、二九八	六〇、五六三	一九二・〇
中大図書館	一八	九、七四二	六、五五七	一一、〇八九	二三、三七五	八五・〇
同大図書館	二〇	一一、五、三六八	二四、三〇七	一一、三一〇	二六、二〇七	九八・〇
東京帝大図書館	一五	一八、八〇六	三八九、〇八二	三二一、六五四	二七、五六六	九二・五
京都帝大図書館	三三	一一、四、三一〇	二八五、八二二	二二四、一三四	二、三〇四	三三・五
東京商大図書館	二〇	六一、〇、二九〇	三二、一八八	二六、五八一	四四、五四六	一八五・〇

(註) 図書館は編者の抜萃に拠る。慶應図書館の蔵書冊数の数字は早大図書館が寄託圖書を含めたので、同様にした。京都帝

大図書館の図書購入費予算は研究室分を含まざるため少い。

田中監督が就任した明治三十八年度の蔵書は一万冊に過ぎなかったが、十七年後は殆んど其の十倍に達している。

以上は田中監督の図書館に於ける業績である。本職は云うまでもなく社会学の教授であり、傍ら仏語も教えていた。しかもその他種々な役職についた。学校の幹事になられたこともあり、小さなことでは商業学校の校長に、また野球部の部長にもなった。真に八面六臂の働きをしたといつてよからう。

田中監督を初めとする六十年の図書館の歴史は、監督の努力と牽引力によって押し進められたといつて過言でない。監督―後には館長といったが―の個性が図書館の色彩を変え得た時代であった。図書館は勿論、監督一人の図書館でなく、数名の事務員、雇員、給仕、小使がいた。このうちの主力は事務員であつて、彼らは大学を卒業し、幹部乃至幹部候補であつた。今日でいえば司書と呼ぶべき専門職であつてよい筈であつたが、司書としての質はまだ向上してゐたとは云えない。館員の専門職化の必要は明治末期から、常に外国の図書館員と比較されて叫ばれつづけており、慶應においても田中監督は日本図書館協会とも緊密に接触しており、一時期協会長を勤めた位であるから、専門館員養成の必要は充分認めていたろうが、遂に慶應の図書館では実現されなかつた。その理由は恐らく他の大学図書館でも大同小異のことがいえたのではあるまいか。

事務員、雇員の制度は慶應義塾全体の制度であつたが、図書館は他の職場と異つたところがある。それは専門職的な才能を要求される。学校の他の部処の事務員と違い、向上のための講習会が明治三十六年という早い時期から始まり、四十年には図書館職員養成所の設置の必要などが協議された。更らに大学図書館となると分類目録の編成や、書

架の整備などに加えて、語学上の才能も他より多く求められる。図書館の事務員には常識の上に、学者的才能も要求される。ところがそういった人材は学校内では教員になりたがる。教員と事務員とは待遇において甚しい差があり、休暇なども格段の違いがある。従って図書館の事務員は一時的な腰掛けであって、教員の欠員があればそちらへ移る。いや、当初には学校側でも卒業して教員への道の一時期を図書館の事務員としたこともある。その初期の形体は既に田中監督時代にもあって、数々の有名教授になったことは前述した。それが後にはより明確になる。大正十一年から十四年まで図書館事務員で、その後普通部、高等部の教師になり、戦後大東文化大学教授になった田中千代松の回想に「恒松君は仕事の山を傍に積上げておいて、せっせとアメリカの史学者ピアードの著書を翻訳していた。私もひとしきり分類の仕事をしては自分勝手なことをした。」と恒松安夫の仕事振りを語っている。恒松は大正十一年から十二年にかけて図書館事務員で、普通部、予科教員を経て、戦後郷里島根に帰って知事をした。回想ではこうもいっている。「学校ではわれわれを大学助手に準じてみてくれたようだ」（田中千代松教授古稀記念論文集）事実、図書館の事務員は大学教員の予備軍であった。それは後にも数々出てくるであろう。図書館事務員を短期間でやめない人も多くは教員を兼務していた。慶應義塾内の中学や夜間学校に教えた。図書館で事務員専任で終始した人は余程の変り者か、特別の事情のある人といってよかった。慶應義塾図書館においては図書館の主軸をなす事務員はこのようにして遂に図書館の専門家になり得なかった。

雇員は大学を卒業しない人がなって、事務員より給与が少なかったので時間外勤務手当や日曜出勤手当、筆稿料などを余分の収入としていた。そして勤務年限が永くなると事務員に昇格した。この中には修練によって狭い職域での

熟練者を多少出した。

事務員雇員がこんな風であったから、格段の学識と先進諸国へ留学した経験を持つ監督が思うままに腕を振えたのは当然であつたろう。圖書の蒐集も運営の指導も監督の手に握られていた。主任と名のつく事務員も独自の識見を待つ程の成長は期待できなかった。もっとも、戦後の昭和三十年代になると教員になるコースが確立して、事務員が教員になりにくくなった。また図書館側からも腰掛け事務員の不経済を悟って、純粹の図書館員を養成しようとしたから、事情が變つて来る。義塾内に図書館学科が持たれたことも、専門職化の過程を一層明瞭にするに役立った。しかしそれでもなお、館長には教授がなり、その交替により図書館のイメージが變る力はまだ持ち続けていた。

慶應義塾図書館の監督は初代田中一貞、次で占部百太郎、小泉信三、高橋誠一郎、五代から館長と名が變つて野村兼太郎、高村象平、前原光雄、佐藤朔、高島正夫と続いた。これらの人は慶應義塾に育った粒よりの人材であつて、或は塾長になり、塾長候補に押され、理事になるなど、義塾の責任ある地位に坐つた人達である。図書館在任中は時に応じての機敏な対処と、それぞれ持味を生じた分野の開拓をした。真に後から回顧してこれらの人を見ると、バラエティに富む構成だつたように思える。次節から占部百太郎監督時代に入る。

